334 【中核産業としての農業に関する議会質問】

「第281回三田市議会(定例会)会議録」 平成17年９月

○17番(家代岡桂子君) (中略)

次に、農業問題についてお伺いいたします。

(中略)

○市長(岡田義弘君) 家代岡議員のご質問のうち農業問題についてお答えをいたします。

農業は三田市にとりまして伝統文化、歴史をはぐくんできた基幹産業であると私は考えております。この三田の長い歴史と文化にはぐくまれた農業は、三田の自然をも豊かにし、そしてそこに住む人間味もすばらしい伝統文化をはぐくんできたと、私はそういう意味で三田の農業というのは一番大事であると、また加えて人間が生きるための生命の根幹をなすものであるわけでございまして、そんな農業について私は一番大事である、一番大切にしなければいけない、こんな思いを持っているところでございます。

しかしながら、先ほど議員がおっしゃったように、三田市の農業が市の産業に占める比重につきましては、平成12年の国勢調査の市内産業別就業者総数５万241人に対して農業は1,568人ということで3%にならず、市全体の就業者数に対して比重は極めて低位であることでございます。

また、国の平成16年度の兵庫農林水産統計年報による農業産出額も約36億円にすぎませんが、ただこれは直接的な経費でございまして、観光等関連産業、あるいはその他の効果も含めるとかなりの役割を担っているんではないかなと考えております。当市は米づくりを中心とした農業を基幹産業として発展してまいりました。現在も多くの農家により暮らしの源である安全・安心で新鮮な農産物が生産され、地産地消の浸透とともに農業は市民にとって欠かせぬものとなっているところでございます。地産地消の取組は、同時に市の食糧自給率の向上にもつながるものであると考えております。

(中略)

また、その中で他都市に誇れる三田市独自の施策ということでございますけれども、ご承知のように、古くはライスセンター等の水稲共同利用施設への助成、あるいはニュータウン開発の進展に伴うれんげまつりやら、あるいは交流イベントの実施、コスモス等の観光農業の振興などがあげられます。最近では地産地消の取組として「パスカルさんだ」への支援がございますが、大型直売施設としては、全国的にも先駆的存在としてよく見学に来られたりしているところでございます。また、学童農園や学校給食の地場農産物の導入についても早くから実施をしてまいりました。そのほか特産振興としてつくしの里、茶香房きらめき等の加工施設への助成等、その時代に応じた、またその時代を先取りしたさまざまな事業に取り組み、積極的な支援を実施してまいりました。農業・農村の持続的な発展は、農業・農村はもとより都市と農村が共生する三田のまちづくり、「人と自然が輝くまち」の礎であり、生産振興のみならず農業・農村の持つ多面的な機能を十分に考慮した上で、今後も三田にふさわしい施策を展開していきたい、こんな考えでおりますので、どうか今後ともご理解をいただきたいと思います。

377 【肉牛肥育の名人】「神戸新聞」 昭和49年8月23日

肉牛肥育の名人　山崎正雄さん(69)

“芸術品”つくる誇り　元気ない牛にはビール2本

毎朝4時に起きる。5時から「かわいくてかわいくてしようがない」と目を細めるメスの“えい子”“みな”“ひでよし”の3頭を順番に散歩させる。「人間かて、涼しい時の運動は気持ちがよろしいやろ」。

家の周囲のあぜ道を2、3周して、帰る牛舎は、専門家が設計したカワラぶき木造建て。冬、太陽がよくあたるよう東に窓をとり、西は西日を避けるため白壁に。1頭ずつ別に仕切り、ベッドのワラの下は板をしき、その下にコンクリート。足を傷めないのと、し尿を1ヵ所に集めるためだそうだ。そういえば、牛舎特有のにおいは少ない。中央の天井には、扇風機が回っている。「牛は暑さにあきまへん。家の中の風通しをよくしたらんと」。夜には、そっと蚊取り線香を置いてやる。

麦などのエサは必ずたき、朝夕2回。昼間は切りワラぐらい。日に何回となく、ワラで体をこする。「毛のツヤと皮膚の新陳代謝がようなりますから」1週間に一度、胃の常備薬としてセンブリをせんじて飲ませ、食欲や元気がない時は、ビール2本。

「こっちが愛情もってやると、牛も知っとるようですわ。1年目には、そりゃええ牛になります」。自宅には、農林大臣賞、近畿東海連合肉牛共進会などのトロフィー、タテが数え切れないほど。表彰状は山のようにあり「入れる額があらへん」。国内はもとより、アメリカ、オーストラリアあたりからも見学が絶えない。「なんとか牛で生活が安定し、牛で知られるようになったんも、やはり愛情しかおまへんやろな」。

（中略）

但馬牛のベコ(子供)を2年間、農家が育成した素牛(もとうし)を買ってきて、1年かかって仕上げるのだが、すべてのカギは素牛に。若いころ、病気を知らずに買ってきて、大金を損するという失敗を重ねてきただけに、選定眼は鋭い。顔の中でもとくに目を見る。やさしい目ならOK。そのほか、骨格、角。もちろん血統書付き。

すべての条件を備えた“えい子”は、昨年12月対面した時には581kgだったが、現在、656kg。あと3、40kgふやして共進会へ出品。その後、赤味に霜のような脂のある最高級の三田肉、神戸ビーフとなって市場へ出回る。いわゆる“霜降り”と呼ばれている。「どのようにうまいかとよう聞かれるが、食べたらうまいに尽きますな。こうばしい味は、ちょっと言葉ではいえまへん」。

手塩にかけた365日目の朝、赤飯とビールを飲ませ、別れを惜しむ。“養育費”は入賞すれば100万から150万円になるが、普通なら7、80万円。「金もうけだけでやったら、こんな理想肥育はできません。やっぱり、“芸術品”つくってるいう誇りがないと、な」。（以下省略）

351 【川除区の水あて当番制度】「朝日新聞」 昭和52年3月30日

ある自治　水利調整に当番制度

福田義孝区長(47)はことし、「水あて当番」になっている。植え出し(田植えの始め)の前に武庫川に作った「針杭の湯」(井堰のこと)をせき止め、水を引く時から、9月下旬に田の水を落とすまで、水あて当番計5人は毎日、全地区を見回り、水利調整を図る。水は宝だ。自分の田にだけ勝手に水を入れる“我田引水”は絶対許されない。それだけ水あて当番の責任は重い。

三田市役所から北へ歩いて約15分の三田市川除地区。武庫川左岸の田園地区で戸数104戸、うち農家24戸。約50haの水田の95%は、針杭の湯から引いた水を使う。

川除地区で恒例の行基講が3月2日昼に、地区の氏神、御霊神社で開かれた。農業土木の祖、行基をたたえるとともに、農作祈願。また農作業の打ち合わせ、農家の親ぼく会を兼ねる。

福田区長を中心に24農家の代表がコの字型に座った。区長の左側は地区役員。区長代理(会計担当)、土木係2人、隣保長5人、御霊神社の氏子総代2人、青原寺の檀家総代の順。右側は、農協との連絡、技術指導を担当する奥田昭一農会長、副会長と農薬などの購買係が並ぶ。その他の人の座順は、1月15日の初集会でくじ引きで決めた。今年中は動かない。

まず土木係が植え出しを6月10日と提案、全員賛成で可決した。この日が決まると、他の作業日程もおのずから決まる。

大溝掘り(幹線水路の大清掃)、小溝(枝分れ水路)掘りは約2週間前。溝掘に出た人は、会計から日当2,700円が支払われる。5、6日前に湯をせき止め、溝に武庫川の水を流し込む。

これからが、水あて当番の大仕事。上流から順々に溝をせき止め、約50haの田に水を入れていく。「日照りが来ちゃいかん。水はそつ(粗末)には出来んぞ」と梅田区長は全員に注意した。

この集会の料理は各農家の持ち回り。どうしても年ごとに皿(さら)の数が増えてくる。3、4年ごとに注意を促す。酒だけは地区の会計から。5本と決まっている。

川除地区には予算が3つある。地区会計、土木会計、農会会計。それぞれ年間30—45万円程度で、行基講の酒は地区会計、溝掘りの日当は土木会計。収入は地区の104戸から集める区費。農家約4,600円、非農家約3,200円、営業所5,000円。「町でいえば町内会費でしょう」と福田区長。

水を守るために強い団結と自治を誇る川除地区も、ここ10年近く用水の汚染に悩まされている。43年に針杭の湯と川除地区の中間に三田工業団地が完成。大溝がすぐわきを通っており、重油が入ると約30分で川除の田を汚す。農業被害が出た重油流出は、去年５、６件もあった。

水あて当番は、難しい水利調整に加えて汚染監視の負担もかぶるようになってしまった。

352 【永沢寺花菖蒲園の業績】

平成元年度朝日農業賞受賞『地域の特性を生かした観光農業』 平成元年

Ⅰ　三田市の自然・経済・社会的環境

（中略）

Ⅱ　集団化の契機と発展の経過

過疎からの脱却を狙う

永沢寺集落は、市街地から16km北へ入った標高500mの山間地にあり、１戸当たりの耕作面積は76aと標準的であるが、米の収量はイモチ病の常発地で10a当たり約420kgと低い。（三田市平均より60kg少ない）　従って春から秋までは米作りと山林労務、冬の間は出稼ぎ（灘五郷の杜氏）で、ほそぼそと生計を立てていた。ハナショウブを導入する1973年以前には、当然後継者もなく、若い者は阪神間に出ていき、婦人までもがゴルフ場等にパートに出かけるなど過疎化が深刻化していた。さらに、1969年から始まった稲作転換事業では、稲を作らず休耕が中心になったため、集落内の転換田が荒れ地となっていた。他方、同時に日本列島改造の嵐がこの過疎地にも及び、こうした農家の苦境に付け込んでゴルフ場や別荘地にしようと開発業者が入り込み、土地を売るようにあおり立てた。

1972年、当時の区長、関口数市氏（当時57歳故人）と村の青年達は「このままでは自分達の村が益々さびれ、乱開発されてしまう」との危機感を抱き、なんとかしなければという気持ちで何回も村集会を重ね、「どうすることによって自分達の村が守れ維持・発展できるか」と絶壁に立つ思いで真剣に考えた。

そして市や農協、普及所にこのことを訴えた。このような村の動きに対して、市・農協・普及所等の関係機関はプロジェクトチームを組み「新しい村作り」に対して積極的な援助を差しのべるべく行動に移した。地域目標は、「何か園芸作物を取り入れ、出稼ぎの無い、家族一緒の生活の実現」を実践することを最終目標とした。

花き農芸組合を結成

（中略）

1973年12月、全戸が参加して永沢寺花き生産組合（会長、故関口数一氏）を結成し、ハナショウブの栽培の第一歩を踏み出した。

（中略）

観光花菖蒲園に転換を図る

「切花」「株販売」で思うように収益が上がらず、先行きに不安を感じていたとき、ハナショウブ苗の購入元（静岡県掛川市、加茂菖蒲園）では、株販売と観光花園としての経営を行っていた。

（中略）

そして最後に残された観光花菖蒲園への転換に踏み切った。

花菖蒲園の建設は、国鉄から払い下げを受けた枕木を利用した遊歩道、カヤブキの料金所、クマザサの休憩所、250台収容の駐車場など組合員が総力を結集し、手作りによる園内整備を行った。そうした中、関口組合長の持病が悪化し、昭和50年２月帰らぬ人となった。失敗にくじけがちな組合員をいたわり、励まし続けた関口組合長だっただけに組合員の動揺は大きかった。「大きな借金をかかえているのに大丈夫か」「誰が関口さんのかわりを」と不安は尽きなかった。そうした中で「花菖蒲園づくりの心労が関口さんの命を縮めたのでは…」との声に、全員が奮起し、新しい生産組合長に和田良三氏（現、代表）を選び、再出発した。

（中略）

1981年～82年にかけて、現在の園に大改造を行った。

その結果、戸数11戸、しかも過疎の村に４～７月には10万人以上の人がやってきて村は大変な活気となっている。

「三田市史」を読む会現代資料編　第４回
田園文化都市としての三田市のなりたち
資料３